

2 外国人学生の感ずる

日本語のむずかしさ

これは、国語審議会の審議の参考として、西本三十二委員が、国際基督教大学の外国人学生を中心として同大学の関係者に日本語のむずかしさについて意見を求めた調査をまとめたものである。

この調査は、話すこと、聞くこと、読むこと、書くことについて、問題別に書いて提出されたもので、かなり詳細な意見のものもあるが、大意を取って類別した。

むずかしい点をあげると同時に、それらの点を外国人の立場から暖かい目で見直し、日本語の普及などについて希望を付しているので、「(日本語の) むずかしい点」「(日本語の) すぐれている点、(むずかしい点と) 相補う点」「希望」の項目に分け、それぞれをさらに問題ごとに分けて、表示した。

算用数字は、意見の提出者16人にかりに番号を付したものである。同じ番号を対照させることによって、同一人の意見がわかり、その意見がはっきりしてくる。

もちろん、これは、狭い範囲の人々の意見であって、すべての意見が代表されているわけではなく、さらにまた広く深い立場から分析されなければならないが、ここでは、国語問題の一つの参考資料としてそのまま掲げてみた。

| 話すこと | むずかしい点 | すぐれている点 相補う点 | 希 望 |
|--------------------|--|---|---|
| | 自由対話④ | | 日本語で歌を歌いたい。④ |
| 発 音 | 一音節の語① 単子音と二重子音との差⑫, sh② 鼻濁音①② ラ行音②⑧ オ列長音② アクセント, ピッチ, イントネーション② 語識別のアクセント① アクセントと無声化⑫ のばしことば, 適当なリズム⑤ 話し方が早い。⑥ | | |
| 単 語 | ヨーロッパ語のような親しみが無い。② 英語からはいった語が必要以上に変わっている。⑩ 発音がほとんど同じである。② (Bungaku~Bunkatsu, Dokusha~Dokushô, Kakeru~Kaneru など) 語の意味が広い。(困る, しまった など。)⑤ 同じことをいろいろの言い方をする。⑭ (身につける~洋服を着る, 帽子をかぶる, ぞうりをはく など) | | |
| 文 法 ⑦は日本人教師 | 数詞, 勘定のしかた② 助数詞(台~そう)⑭ 動詞の活用形が多い。⑥ 活用形が多い。⑦ 他動詞, 自動詞, 使役動詞, 受身動詞の区別② 「ならべてあります」と「ならんでいます」の区別⑭ 「は」と「が」の区別②⑬ 助詞, 添えことば(てにをは, さえ, せめて など。)⑤ 句末, 文末の助詞(接続助詞, 終助詞)(か, ので, のに, だって など。)⑤ 意味のない終助詞(が, けど など。)⑦ 主語の位置② 従属節② 間接話法② | ある点では, 構造は英語より論理的である。たとえば, 冠詞がない。 助詞が文の成分の順序の役目をしている。⑧ | 活用の単一化⑦ 主語は必ず最初に置く。② |
| 文 体 敬 語 | 敬語(あげる, くださる, もらう, いただく)②⑧⑪⑬⑮ 敬語がスペイン語よりむずかしい。⑥ 敬語の言い方は長くて表現に時間と努力がいる。③ 敬語の二つの言い方。③ 自分のむすことあなたのむすこととばがちがう。⑩ 同じことに対する3種の敬語⑫ 敬語の言い方は, 外国人にとって意味のちがい, 語感のちがいは少ない。③ 敬語の誤用から日本人に誤解される。③ 特に婦人に対する敬語。⑭ いちばんていねいな言い方(日本人の中にも聞かれない。)④ 普通の敬語の言い方(だれ, どなたですか, どなたさまですかの類の区別。)⑤ 教室で習うものと家庭用語, 対人用語, 世間の談話とのちがい。⑯ | 敬語は表現簡素化の効用がある。 (家内と奥様)⑧ | 「ます」「です」体に統一 ⑦ ていねい語の統一(赤うございます→赤いです など。)⑦ |

| 聞くこと | む ず か し い 点 | す ぐ れ て い る 点 相 補 う 点 | 希 望 |
|-------------------------------|--|---|--|
| <p>聞き方</p> <p>発音</p> | <p>話し方のむずかしさがそのまま聞き方のむずかしさに通ずる。②③</p> <p>会話がむずかしい。③</p> <p>話し方がはっきりしない。学生に名まえを聞いても、何度も聞いてもらわないとわからない。⑪</p> <p>早口である。③⑭</p> <p>発音特に男子の早く話すときの発音がわかりにくい。②</p> <p>女性には、相手に向かって話すというよりも地面に向かって話すという傾向がある。⑫</p> <p>くちびるを使うことが少ないので、声をのむような印象を与える。それで、語の初めと終りの区別、語自身の区別が困難である。①</p> <p>口をあけないで話し、くちびるをじゅうぶんに使わないで話す。⑧</p> <p>くちびるを動かさないで、どんなことばが用いられているのかわからない。⑫</p> <p>一般にアクセントに欠けているため、アクセントによって語を区別することになれているものにとっては、語を抜き出すことがむずかしい。①</p> | <p>聞き方はわたくしにとっていちばんやさしい。⑭</p> <p>しかしこれは言語自体の問題ではなくて、言い方の問題である。⑪</p> | <p>発音の明せきは、すべての言語で強調されなければならない。⑧</p> |
| <p>単語</p> | <p>ことばが短いので、ちょっと早くしゃべるとわからなくなってしまう。⑤</p> <p>音が少ないので言ったことをまちがえる。同音語が多い。(はな・はな, はし・はし, 国歌, 国家, 国花 など。)⑤⑮</p> <p>同音異義語があつてこんざつする。⑩</p> <p>類音語もまちがえる。(くも, くま)⑤</p> <p>術語がむずかしい。③</p> | | |
| <p>文法</p> <p>文体</p> <p>敬語</p> | <p>文の構造が、外国人には心の中で逆転させなければならない。①</p> <p>動詞の主語が何かをいつも考えなければならない。②</p> <p>二重否定。②</p> <p>年齢によって、職業によってちがったことばづかいをするのでその会話を全部理解しようとする、いくつかの言語を学ばなければならない。⑮</p> <p>文の終りに敬語をつけるので、親しいことばがまったくちがったものにひびく。⑩</p> | | <p>いろいろのことばが聞きたい。たとえば、歌謡、ラジオ解説、少女のことば、老人のおしゃべり、子供のおしゃべりなど。④</p> <p>日本の文は、ずっと論理的になってほしい。①</p> |

| 読むこと | む ず か し い 点 | す ぐ れ て い る 点 相 補 う 点 | 希 望 |
|--------------|---|---|--|
| 書くこと との関係 | 書くことと同じである。② 書くことに関したことは、読むことにもあてはまる。⑧ | | |
| 朗 読 | ピッチーアクセントのことを除いては、特別な問題はない。⑭ | | |
| 字 体 | 早く書いてある筆跡は読みにくい。② | | |
| 書 式 | 縦書きを読むことがむずかしい。④ | 縦書き左横書きについては、統計表図表の類が多くなっており、それは西洋ふうになっている。西洋では、左から右へ上から下へ読む習慣によって、統計図表はいちばんたいせつなものは左上にくることになっている。このことが、日本の左横書きの論拠となっているが、おもな論拠とは思わない。⑧ | |
| 表記の体系 | 漢字、ひらがな、カタカナという三つの異なった字を用いる問題。① | | すべての国語を通じてたくさんの外来語を含んでいるのだから、カタカナはなくてもよい。「たばこ」のようなひらがなの使い方によってじゅうぶん成功していると思う。① |
| 漢 字 | 漢字がわからない。それを除いては別に困難はない。⑤ たくさんの漢字を記憶しなければならないのが困難である。⑫ 漢字があいまいである。⑪ 一つの字にいろいろな読み方がある。⑤ 同じ漢字が多く違った読み方をするのが、最大の問題である。⑩ 漢字の読みかえがむずかしい。たとえば、「 <u>所以</u> 」「 <u>台所</u> 」「 <u>場所</u> 」「 <u>近所</u> 」「 <u>所謂</u> 」など。 新出漢字は、意味からいっても発音からいっても手がかりがない。① 名まえの読み方がむずかしい。② 読むことにはまったく興味がない。どんな本も読まない。特に物語は読まない。たいして経験がない。しかし、アメリカのものほどはむずかしくないように思われる。人名、地名特にたくさんの漢字を使った中では、その発音、読み方がわからない。一つの語をどう発音するか、その一定した体系がない。③ 一つのことばにちょっとした感じのちがいを表わすために、二つ以上の漢字を用いることもへいこうである。たとえば、「 <u>現わす</u> 」「 <u>表わす</u> 」「 <u>著わす</u> 」など。⑬ | しかし、「語」のように一方が意味、一方が音を表わしているのは貴重なことである。① ひらがなとカタカナ以外は読まないで、ほとんど何もいうことはない。もし日本人のように読むことができるためには母国語がローマ字書きだからという簡単な理由だけで、日本語もローマ字書きが好ましい。一方、日本の文字と漢字は古雅で、保存したい日本の伝統の一つである。ローマ字書きの日本語などは考えていない。読めないけれどもその文字が好きである。何ともいえないものを訴えてくる。⑥ | 漢字をもう少し制限する。500字から800字ぐらいにする。その場合、1字1音しか表わさないもの、たとえば、「見る、聞く、読む」などに制限する。⑦ もし、漢字がなくなるなら、かな書きだけで習いやすく、何の困難も伴わないだろう。⑪ 読みかえをなくする。漢字1字は、いつも同じ音を表わす。⑦ 漢字自身の複雑さ。漢字の簡易化が引続いてなされ、終局的には固有名詞の写し方になんらかのくふうをしてひらがなにとって代られることを希望する。① 漢字にはかなをあて町名などや国際的な書き物のときにはヨーロッパふうのアルファベットを用いることを提案したい。⑫ すべての標準的な書物には必ずふりがなをつけるように法制化し、ローマ字またはひらがな書きの辞書が編ざんされ、使用され、外国人が日本文字に対する第一級の知識を得るようにしてほしい。 たとえば、かみ KAMI/ 紙 かみ KA'MI (神?) など。アクセントを示すしるしをつける。⑬ |
| 送りがな | 同じ語を書くのに、漢字とかなとの用い方が不統一である。④ | | 送りがなを統一し、動詞でも名詞でも同じにする。たとえば、「話します」「話し」として、漢字はいつも同じ音を表わすようにする。⑦ |
| 文 法 | 単複の区別のないのも困る。一つのことか二つ以上の物のことかはっきりしないことが多い。⑫ | | |
| わかち書き | 語のわかち書きをしないので読みにくい。⑪ | | わかち書きをしていないから読みにくいというのは、おそらく自分の語いが少ないからであろう。自分の語いが多いなら、ことばによくなれていて、心の中で切ることができるのであろう。⑪ |

| 書くこと | む ず か し い 点 | す ぐ れ て い る 点 相 補 う 点 | 希 望 |
|------------------------|--|--|---|
| 読むこと との関係 | 全体としては、書くことの問題は、読むことの問題と同じである。 | | |
| 一 般 論 | 書くことに別に問題はない。⑤ 日本語は書かない。習ったわずかな文字も書く能力がないのでますますむずかしくなるだろう。⑥ 書けない。講義中ノートがとれない。⑤ | | 日本人の教授は、もっとゆっくり話すなり、また、なんらかの方法で外国人を助けるようにしてもらいたい。外国人の教授は、いつも日本人の学生には手かげんしている。③ 基本漢字 500字を用いた新聞が発行されれば日本に住む外国人がニュースを知るのに役に立つ。もちろん新聞のふりがなは役に立つ。⑬ |
| 書記体系 | 外国人学生の日本語に対する不平は、漢字を用いることであり少し低い程度でかなを用いることである。⑧ 漢字を勉強するのがむずかしい。かたかなもまったく新しいときは書いたりするのが非常にむずかしい。④ | | 書くことは、非常におもしろいので、もっと時間をかけられたらと思う。④ |
| 漢 字 と ふりがなと ローマ字 | 漢字がむずかしい。⑪ 書くことは必然的に読むことよりむずかしい。漢字を認知するのはやさしいが、それを正しく書くのにはかなりの練習がいる。その音自体が書く形への手がかりを与えない。① 漢字は書きにくい。あまりめんどうである。長く時間がかかる③ 漢字はたいへん覚えにくい。第1に、形が似ているのでまちがえやすい。：賜、財、規、腸、腹など。 第2に、読み方がいろいろある。：生＝せい、しょう、じょう、いきる、うまれる、うむ、き、はえる、なま 第3に、同音異義語が多い。：西、青、生、世、正、晴…など。② 漢字は部分に分解するだけで、学習の体系がない。たとえば、左側がイで始まることばをすべて集めるような方法があるだけである。⑩ 漢字は、字源のようなその背景なしに覚えるのはむずかしい。④ 漢字は、忘れやすく、まちがいやすい。逆に書くことやさかさまに書くことが多い。⑤ 読み方が多いので、書き方がめんどうである。⑤ | | 漢字を 500字から1000字にへらして、はっきりした意味を持っているものだけに限る。 意味のない字にはかなを用いる。⑬ 日本の文学が広く西欧の人に読まれなければ日本との思想の交換はできない。日本がほんとうに思想の交換を望むのなら、ふりがなを用いて読むことを容易にし、ふりがなを用いた辞書を作らなければならない。⑬ 基本漢字をローマ字によって並べた、手ごろなポケット辞典を作る。⑬ |
| か な と ローマ字 | 二重子音「 <u>け</u> っこの類」長母音「 <u>もう</u> の類」がむずかしい。⑭ | かなはローマ字と同じように学びやすい。まずく書いたローマ字よりはかなのほうがやさしい。⑪ | なんらかの形式のローマ字を採用すると、学習が容易になるであろう。⑩ かなで外国語を表わすのは便利と思うが、かたかなの代りにローマ字を用いるほうがもっと便利である。書きことばを簡易化する好ましい方法としては、ひらがなを唯一のかなにして、外国語は、ローマ字で表わすようにすることである。⑧ かながローマ字によって代えられると、はねる音やつまる音を表わすことができるようになるであろう。⑧ |
| 縦 書 き 横 書 き | | | 縦書きも横書きもどれでもよいが統一することが望ましい。⑧ |
| 文 法 文 章 | 非常に簡単な問題なら書くことができるが、その書いた文は日本語とはちがっている。もし、試験なら日本語では答えようとしない。③ | 日本語の書きことばはあいまいで不正確だといわれるが、これは日本語自体の問題でなく使用者の問題である。学者の自分の聞いたものを深く見せようとする態度があいまいさをきたしているのである。⑧ | |

3 昭和32年度国語教育研究協議会の記録

〔趣 旨〕

国語の改善と国語教育とは密接な関係にある。よって、国語政策に基く国語教育上の文字・ことばについての諸問題を研究協議することによって、国語教育の充実発展をはかり、また今後の国語改善方策のよりどころを得ようとするものである。

〔開催地域と日時〕

東部地区（会場——静岡大学）

10月4日（金）、5日（土）

中部地区（会場——富山工業高校）

9月7日（土）、8日（日）

西部地区（会場——長崎大学、長崎東高校、長崎市立片淵中学校）

11月8日（金）、9日（土）

〔各地の状況〕

東 部 地 区

主 催 文部省・静岡大学・静岡県教育委員会

講 演

敬語法と教育 国語審議会委員、学士院会員 金 田 一 京 助

ことばの生活と教育 国立国語研究所長 西 尾 実

児童生徒の読解力と表現力について

静岡大学教授 望 月 誼 三

現在の国語政策について 文部省調査局国語課 天 沼 寧

研究発表と協議

(1) 小 学 校 部 会

読解指導——表記を中心として——

宇都宮大学学芸学部付属宝木小学校 高 橋 忠 和

かたかな学習について

静岡県藤枝市立藤枝第二小学校 中川すみ江
読解のための文法指導

静岡市立横内小学校 望月辰夫
作文における語法指導（段落の指導について）

静岡大学教育学部付属浜松小学校 藤田秀徳
協議題 読解指導 ——表記を中心として——

司会 静岡県伊東市立伊東西小学校長 土屋康雄
指導 静岡大学教授 望月誼三

同 助教授 前川清太郎

文部省調査局国語課 天沼寧

記録 静岡県指導主事 伊久美直四郎

(2) 中学校部会

国語表記について 盛岡市立上田中学校 中村義一

作文指導における推こうについて 山梨大学学芸学部附属中学校 伊東武雄

文のきりかたの表わし方について 静岡大学教育学部附属静岡中学校 朝井鑽平

学習指導の立場からみた送りがなの統一問題 静岡県浜名郡浜北町立北浜中学校 鈴木波男

作文にあらわれた表記の問題 静岡県富士郡芝川町立稲子中学校 中村友明

国語表記上の基本的問題点の考察 静岡市立籠上中学校 森 実

協議題 読解指導 ——表記を中心として——
司会 静岡県森町立森中学校長 河合俊一

指導 静岡大学教授 南 信
同 助教授 岡田英雄

静岡県指導主事 堀池敬

記録 静岡県指導主事 河西菊雄

(3) 高等学校部会

古文解釈における文論的考察（更科日記を中心として）

静岡県浜松市立高等学校 寺 田 泰 明
教育文法への批判と提案

静岡県立吉原高等学校 徳 田 政 信
文法と文のニュアンス

埼玉県立川越高等学校 佐々木 信 治
入門期における文語文法の指導

静岡県立静岡高等学校 影 山 竹 次
茨城方言における「じ」と「ぢ」について

茨城県立下館第二高等学校 杉 田 能 信
協議題 読解指導 ——文語文法を中心として——

司 会 静岡県立気賀高等学校長 西 田 憲 一 郎
指 導 静岡大学教授 窪 野 桂

同 助教授 植 松 茂
文部省調査局国語課長 白 石 大 二

記 録 静岡県指導主事 鈴木 武 文
静岡県立静岡高等学校 吉 川 晴 夫

同 城化高等学校 土 屋 安

(4) 全 体 協 議 会

主 題 今後の国語政策について

司 会 文部省調査局国語課長 白 石 大 二
指 導 参加講師

記 録 文部省調査局国語課 武 宮 り え

中 部 地 区

主 催 文部省・富山大学・富山県教育委員会
講 演

国語政策の方向

国語審議会会長・芸術院会員・文学博士 土 岐 善 麿
文法教育の重点

国語審議会委員・東京教育大学教授・文学博士 佐 伯 梅 友
文学とことば

富山大学教授 大 島 文 雄

漢字学習の問題

文部省調査局国語課

塩田紀和

研究発表と協議

(1) 小学校部会

漢字学習について

京都市立清水小学校

高橋俊二

富山県新湊市立海老江小学校

北川国次

協議題 1 標準語教育について

2 漢字学習について

司会

富山大学教育学部付属小学校

新村作

指導

富山大学教授

和田徳一

文部省調査局国語課

塩田紀和

(2) 中学校部会

漢字学習について

富山県中新川郡雄山中学校

真田行雄

漢字学習の困難点について

富山県東礪波郡城端中学校

橋本米次郎

国語表記の実態と問題点

石川県小松市立栗津中学校

蕪城正芳

送りがなについての調査から

富山県西礪波郡戸出中学校

俵正孝

協議題 1 漢字学習について

2 国語表記の問題について

司会

富山県東礪波郡井波中学校長

清原馨

指導

富山大学助教授

松田順吉

文部省調査局国語課長

白石大二

(3) 高等学校部会

漢字の語い学習指導資料について

新潟県立新津高等学校

北原戊平

国語表記の問題について

大阪府立住吉高等学校

浜中武彦

漢字調査について

富山県立高岡女子高等学校

増 山 乗 真

- 協議題 1 漢字学習について
2 国語表記の問題について

司 会
指 導

富山県立新湊高等学校長
東京教育大学教授
富山大学教授
同 助教授

数 土 寅 雄
佐 伯 梅 友
大 島 文 雄
手 崎 政 男

記 録

富山工業高等学校
富山商業高等学校

中 川 昌 保
山 本 作 弘

(4) 全 体 協 議 会

主 題 国語改善と国語教育

司 会
指 導
記 録

文部省調査局国語課長
参加講師
文部省調査局国語課

白 石 大 二
友 部 浩

西 部 地 区

主 催 文部省・長崎大学・長崎県教育委員会
講 演

文章論の諸問題

東京大学教授・文学博士

時 枝 誠 記

小学校の文法教育

国語審議会委員・京都大学教授・文学博士

遠 藤 嘉 基

文法教育について

長崎大学教授

渡 辺 正 数

国語問題と国語政策

文部省調査局国語課長

白 石 大 二

公開授業

(1) 小学校（会場 長崎大学学芸学部附属小学校）

1年 どんぐりごま

長崎市立伊良林小学校

峯 ト ミ

2年 小づつみ

- | | | |
|------------------------|---------------|---------|
| | 長崎市立新興善小学校 | 田 中 浩 一 |
| 3 年 山の子ども | | |
| | 長崎大学学芸学部付属少学校 | 久 貝 春 夫 |
| 4 年 Ensoku no Hi | | |
| | 長崎市立小鳥小学校 | 一 瀬 篤 子 |
| 5 年 本で調べる | | |
| | 長崎市立磨屋小学校 | 松 浦 敏 夫 |
| 6 年 よだかの星 | | |
| | 長崎大学学芸学部付属小学校 | 山 田 喜 孝 |
| (2) 中学校 (会場 長崎市立片淵中学校) | | |
| 1 年 ねこのおどり | | |
| | 長崎市立片淵中学校 | 増 山 実 |
| 2 年 安寿と厨子王 | | |
| | 長崎市立桜馬場中学校 | 浦 上 忠 良 |
| 3 年 生まれいずる悩み | | |
| | 長崎大学学芸学部付属中学校 | 中 島 栄 一 |
| (3) 高等学校 (会場 長崎東高等学校) | | |
| 1 年 あくがれ (更級日記) | | |
| | 長崎県立長崎東高等学校 | 本 田 一 夫 |
| 2 年 生ひさきなくまめやかに (枕冊子) | | |
| | 長崎県立長崎東高等学校 | 豊 永 徳 |
| 3 年 国際の民主主義 | | |
| | 長崎県立長崎東高等学校 | 大 脇 勘 治 |

研究発表と協議

(1) 小 学 校 部 会

小学校における読解指導と語法指導

島原市立第三小学校 松 本 巖

小学校における漢字学習の実際

佐世保市立光園小学校 赤 木 武

漢字の学習指導について

長崎市立北大浦小学校 桑 畑 忠 治

協議題 1 漢字学習

2 文法教育（国語表記を含む。）

司 会

長崎市立北大浦小学校長

斉 藤 正 雪

指 導

京都大学教授

遠 藤 嘉 基

長崎大学助教授

稲 田 繁 夫

長崎県指導主事

馬 場 正 徳

(2) 中学校部会

中学生の自由研究

長崎市立梅香崎中学校

田 中 英 吉

読解過程における文法

長崎大学学芸学部附属中学校

元 村 勉

協議題 1 文法教育（国語表記を含む）

2 文学教育

司 会

長崎市立片淵中学校長

竹 下 忠 吉

指 導

東京大学教授

時 枝 誠 記

長崎大学助教授

河 野 俊 秀

長崎大学講師

西 島 宏

(3) 高等学校部会

高校における文法教育

長崎県立大村高等学校

林 田 明

文学教育の問題点

長崎県立口加高等学校

中 村 一

協議題 1 文法教育（国語表記を含む）

2 文学教育

司 会

長崎県立長崎東高等学校教頭

平 山 多 馬 喜

指 導

長崎大学教授

渡 辺 正 数

長崎県指導主事

竹 下 哲

文部省調査局国語課長

白 石 大 二

(4) 全体協議会

主 題 1 漢字学習

2 文法教育（国語表記を含む）

3 文学教育

| | | |
|-----|-----------------|-------|
| 司 会 | 長崎大学学芸学部附属中学校総務 | 下 条 進 |
| 指 導 | 参加講師 | |
| 記 録 | 文部省調査局国語課 | 須之内英夫 |